



和久環組  
代表取締役  
**鎌田 友和**  
かまた ともかず

壱番屋  
創業者特別顧問  
**宗次 徳二**  
むねつぐ とくじ

1978年、静岡県生まれ。2000年に東洋大学工学部を卒業後、神奈川県総合不動産会社に入社。戸建住宅やマンションの新築販売を担当し、全社トップの営業成績を達成。3店舗の支店長を歴任した後の2012年に流通事業本部長となる。2013年に株式会社和久環組を設立、代表取締役後任に就任。今後1年以内にネットワーク加盟店舗を全国100店にまで拡大。「中古購入+リノベーション」をワンストップで提供するという独自性の高いサービスを普及させることで、全国で「ワクワクする暮らし」を提供することをめざしている。

1948年、石川県生まれ。高校卒業後、八洲開発株式会社を経て、1970年に大和ハウス工業株式会社に入社。1973年に独立。不動産仲介業を経て、1974年に喫茶店「バックス」を開業。1978年に「カレーハウスCoCo壱番屋」を創業。1982年に株式会社壱番屋を設立し、代表取締役社長に就任。1998年に代表取締役会長、2002年に創業者特別顧問に就任。2003年にNPO法人イエローエンジェルを設立し、社会貢献活動に従事。2007年にクラシック音楽専用の「宗次ホール」を名古屋市内にオープンした。著書に「日本一の愛人経営者」(ダイヤモンド社)などがある。

社会貢献・地域貢献に力を入れているベンチャー企業に贈られる「宗次賞」。第3回の受賞者は和久環組代表の鎌田氏だ。中古住宅とリノベーションを組み合わせ提供するユニーク事業を展開するかたわら、森林保全活動にも取り組んでいる。同賞の創設者である宗次氏は「カレーハウスCoCo壱番屋」の創業時から寄付活動を開始。経営から退いた後は社会貢献活動に専念してきた。企業における社会貢献の重要性について、ふたりが語りあった。

つねに目標を追い続ける  
経営者人生であってほしい

——第3回「宗次賞」に和久環組を選んだ  
決め手を教えてください。

宗次 起業したのが2013年。まだ2年目であるにもかかわらず、森林保全活動への協力に取り組んでいます。普通は社歴が浅いことではない。それがいちはばんな大きな決め手です。

それにくわえて、鎌田さんの人柄。ビジネスパーソンに不可欠である「ニコビハキ」を実践している。そういう起業家のなかには、なみがない元気がいっぱいいる。ヒトもいますが、鎌田さんはしっかりと社会貢献活動を手がけている。期待を込めて選ばせてもらいました。

「CoCo壱番屋」創業者がCSRに注力する起業を表彰

社会貢献は小さなことから  
早く始めることが肝心です

鎌田 当社は創業して2年と少し。できていくことがまだまだ小さいのは、自分自身がいはばよくわかっています。それでもこのような賞をいただいたのは、期待値なのだろうと。しっかり事業を伸ばしながら、社会にもっと大きな貢献ができる人間や会社になりたいです。

宗次 事業のほうもこれから楽しみです。リノベーション事業はすま産業。大手はなかなかできないことです。バイオエナジーとしてさらに発展していくでしょうし、そのタネをもちいる。

——鎌田さんはどういうきっかけで森林保全活動を始めたのでしょうか。

鎌田 神奈川県が水源林を保全する「未来につなぐ森づくり」かながわ森林再生50年構想(二)を、2006年を起点に進めていると聞いたことです。「2056年までに持続可能な人工林や多様な生き物がすむ広葉樹林をつくる」という構想に共感。寄付や協力活動をしたのです。

——というも、私たちは住宅の内装を手がけるにあたり、工業的に加工された製品ではなく、無垢の木材を使うことにこだわっています。森から木というめぐみをいただいて事業サービスを展開している以上、還元しなくてはならない。

はいけない。「小さくても協力できることがある」とアクションを起こしたのです。

宗次 始めるときはなににせよ、小さいもの。それでいいのです。「よい」と思ったらまず行動する。それではじめて結果が出るのです。

——してなにか行動するときには、目標をしっかりとっておく必要があります。それがないと、つらいことがあったときにあきらめてしまいかねない。つねに目標を追い続ける経営者人生であってほしいですね。

小さな目標であっても、達成してまた次の目標を目指す。それを繰り返していけば、15年・20年と経つうちに、自然と会社が大きくなり、社会に貢献できることも大きくなっていきますから。

地域貢献への想いなくして  
事業の発展もあり得ない

——ベンチャー企業にとって、社会貢献はどんな意味をもっていますか。

宗次 ベンチャーに起業家に限らず、人として困っているヒトがいれば助けるのは当たり前のこと。そのうえで、経営者が事業を展開できているのは、多くの人の力添えがあるからです。

らです。事業を進めていくなかで、ときに他人に迷惑をかけることもあるでしょう。

——そう考えると、社会に貢献することは「義務」のように思ってしまうのでは。少しでもゆとりがあれば、どんなカタチでもいいので、自分のできるなにかの貢献をしてほしいですね。

鎌田 自分本位ではなく、「事業をさせていたでいる」という謙虚な気持ちで忘れずに、地域社会に恩返ししながら、事業を伸ばしていきたいです。そもそも事業の発展と社会貢献は切り離せない。体のもの。そういう理想はもって豊かになるでしょう。

宗次 賞をいただいた、その輪を広げていく責任もある。ですから、しっかりと伝えていきたいですね。

「業績を順調に伸ばして納税すること  
が社会貢献だ」という考え方もあると思  
います。

宗次 ええ。しかし、経営には「やさしさ」がないといけません。

——「自分や関係者だけがうるおえばいい」という考えは通用しない。「地域貢献したい」という想いが根底にないと、事業の発展にもつながらないと思いますよ。

ウサギとカメなら  
あせらずカメになれ

——最後に、ベンチャー起業家へのメッセージをお願いします。

鎌田 以前、宗次さんから創業されて間もないころの体験談を聞きました。年の瀬に、正月を迎えるのに70万円の現金が必要になった。信用金庫から100万円の融資を受け、社員に給料を支払い、30万円が残った。そのうち20万円を寄付。10万円を握りしめて年を越したと。

——「そういうところからスタートされたのだな」と、勇気ももらいました。結局のところ、自分が決めた道を信じて進むだけなのだと思えます。

宗次 スタートアップ時は経営が不安定で、いどうなるかわからない危うさがあります。それでも周囲に期待にこたえながら、「生懸命取り組んでいく。そのうちに、徐々に会社は強くなっていくものです。」

——たかさんの成功事例があるなかで、すぐにあとを追いたくなることもあるでしょう。けれど、ウサギとカメだったら、カメでいい。情熱をもち、先を見えつつ、あせらずに事業に取り組んでください。